

12. いちご

・殺菌剤

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
11	アミスター20フロアブル	散布	収穫前日まで	苗床:4回以内、本圃:3回以内	
M3	アントラコール顆粒水和剤	散布	仮植栽培期	6回以内	
-	オレート液剤	散布	発病初期～収穫前日まで	-	
U13	ガッテン乳剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
M1	キノンドーフロアブル	散布	育苗期	3回以内	
-	(クロルピクリン) クロピク80 ドロクロール	土壌くん蒸	-	2回以内(但し、床土は1回以内、圃場は1回以内)	
	クロピクテープ	土壌くん蒸	-	1回	
	クロールピクリン	土壌くん蒸	-	2回以内(但し、床土は1回以内、圃場は1回以内)	
NC	サフオイル乳剤	散布	収穫前日まで	-	
M1	サンヨール	散布	収穫前日まで	6回以内	
NC+M1	ジーファイン水和剤	散布	収穫前日まで	-	野菜類(なすを除く)
2	スミレックス水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
3	トリフミン水和剤	散布	収穫前日まで	5回以内	
-	粘着くん液剤	散布	収穫前日まで	-	野菜類
NC	ハーモメイト水溶剤	散布	収穫前日まで	-	野菜類
U6+3	パンチョTF顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
-	フーモン	散布	収穫前日まで	-	野菜類
M7	ベルコート水和剤	散布	育苗期(定植前)	5回以内	
-	ボタニガードES	散布	発病前～発病初期	-	野菜類
BM2	ボトキラー水和剤	ダケ外投入	発病前～発病初期	-	野菜類
BM2	ボトピカ水和剤	散布	発病前～発病初期まで	-	
19	ポリオキシシンAL水和剤	散布	収穫開始14日前まで	3回以内	
-	ムシラップ	散布	収穫前日まで	-	野菜類
3	ルビゲン水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
2	ロブラール水和剤	散布	収穫前日まで	4回以内	

・殺菌剤(参考農薬)

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
11	アミスター20フロアブル	散布	収穫前日まで	苗床:4回以内、本圃:3回以内	
M4	オーソサイド水和剤80	散布	収穫開始14日前まで	5回以内	
7	カンタスドライフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
1+10	ゲッター水和剤	散布	収穫開始21日前まで	3回以内	
M1	サンヨール	瞬間～5分間苗浸漬	定植前	1回	
M3	ジマンダイセン水和剤	散布	仮植栽培期(但し、収穫76日前まで)	6回以内	
11	ストロビーフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
2	スミレックスくん煙顆粒	くん煙	収穫前日まで	3回以内	
12	セイビアーフロアブル20	散布	収穫前日まで	3回以内	

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M7+17	ダイマジン	散布	収穫前日まで	3回以内	
3	トリフミン水和剤	散布	収穫前日まで	5回以内	
11	ファンタジスタ顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
9	フルピカくん煙剤	くん煙(通常 10~15 時間)	収穫前日まで	3回以内	
9	フルピカフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
50	プロパティフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	
M7	ベルコート水和剤	散布	収穫前日まで (生育期)	5回以内	

・殺虫剤

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
3	アーデント水和剤	散布	収穫前日まで	4回以内	
-	アカリタッチ乳剤	散布	収穫前日まで	-	野菜類
4	アドマイヤー 1 粒剤	植穴土壌混和	定植時	1回	
-	(コレマンアブラバチ) アフィパール	放飼	発生初期	-	野菜類 (施設栽培)
29	ウララDF	散布	収穫前日まで	2回以内	
-	エコピタ液剤	散布	収穫前日まで	-	
15	カウンター乳剤	散布	収穫前日まで	4回以内	
15	カスケード乳剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
-	(チリカブリダニ) スパイデックス	放飼	発生初期	-	野菜類 (施設栽培)
13	コテツフロアブル	散布	収穫前日まで	2回以内	
-	サフオイル乳剤	散布	収穫前日まで	-	
-	サンクリスタル乳剤	散布	収穫前日まで	-	野菜類 (なす、トマト、ミニトマト、しゅんぎくを除く)
-	(ミヤコカブリダニ) スパイカルEX	放飼	発生初期	-	野菜類
-	(スワルスキーカブリダニ) スワルスキープラスUM スワルバンカーロング	放飼	発生初期	-	野菜類
33	ダニオーテフロアブル	散布	収穫前日まで	2回以内	
25	ダニサラバフロアブル	散布	収穫前日まで	2回以内	
9	チェス顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
5	ディアナSC	散布	収穫前日まで	2回以内	
10	ニッソラン水和剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
4	バリアード顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
10	バロックフロアブル	散布	収穫前日まで	1回	
21	ピラニカEW	散布	収穫前日まで	2回以内	
-	フーモン	散布	収穫前日まで	-	野菜類
-	プリファード水和剤	散布	発生初期	-	いちご (施設栽培)
20	マイトコーネフロアブル	散布	収穫前日まで	2回以内	
1	マラソン乳剤	散布	収穫 3 日前まで	5回以内	
4	モスピラン粒剤	植穴土壌混和	定植時	1回	
4	モスピラン顆粒水溶剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
-	粘着くん液剤	散布	収穫前日まで	-	野菜類

・殺虫剤（参考農薬）

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
15	アタブロン乳剤	散布	収穫前日まで	3回以内	
6	コロマイト水和剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
5	スピノエース顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	2回以内	
21	ダニトロンフロアブル	散布	収穫前日まで	1回	
UNF	ボタニガードES	散布	発生初期	-	野菜類
15	マッチ乳剤	散布	収穫前日まで	4回以内	
23	モベントフロアブル	散布	収穫前日まで	3回以内	

注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。

注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける（「薬剤抵抗性管理」参照）。

注3) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

注4) 蚕毒・魚毒については、「56. 野菜類の総括注意」も参照する。

病害虫名（F：菌類病、B：細菌病、V：ウイルス病、O：その他の病原体）

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
萎黄病 (F)	植付前	1. 無病の親株から採苗する。 2. 苗床をクロロピクリン剤で消毒する(土壌消毒の項参照)。 3. 発病株は早期に除去する。	1. 新しく発生した場合は、苗で持ち込まれる事例が多い。
根腐病 (F)	植付前	1. 高畦栽培する。 2. 水耕栽培では、養液への汚染土壌の混入に注意する。また、発生した場合は休栽後、養液を交換し、資材をケミクロンGの1,000倍液に10分間浸漬するか500倍液をジョロで散布して消毒する。	1. 5月下旬頃より発生が多い。 2. 排水不良や冠水により発生する。
芽枯病 (F)	生育期間	1. 無病苗を用いる。 2. 同じ苗床で連作しない。	1. 深植すると発生しやすい。
じゃのめ病 (F)	植付前	[参考農薬] 1. ジマンダイセン水和剤600倍液を散布する。	
	生育期間	1. 排水を良くし、過湿地での栽培を避ける。 [参考農薬] 1. トリフミン水和剤3,000倍液を散布する。	1. 収穫直前と3月下旬～4月下旬を中心に防除する。
灰色かび病 (F)	生育期間	1. ポリオキシシンAL水和剤1,000倍液、ロブラール水和剤1,500倍液、スミレックス水和剤2,000倍液のいずれかを散布する。 [参考農薬] 1. カンタスドライフロアブル、セイビアーフロアブル20の1,000～1,500倍液、アミスター20フロアブル1,500倍液、ダイマジン2,000倍液、フルピカフロアブル2,000～3,000倍液のいずれかを散布する。 2. 園芸用ガラス室、ビニールハウス、ビニールトンネル等密閉可能な場所では、スミレックスくん煙顆粒を室容積100立方メートル(床面積50㎡×高さ2m)当り6g、又はフルピカくん煙剤を室容積500立方メートル(床面積250㎡×高さ2m)当り50gくん煙する。	1. ハウス、トンネルでは換気を行い、湿度を下げる。 2. 過繁茂にしない。 3. 着果後、1週間おきに散布する。 4. 同一系統の薬剤の連用を避ける。ロブラール、スミレックスは同系統である。 5. セイビアーはレタスにかからないようにする(葉害)。 6. フルピカはおうとうにかからないようにする(葉害)。 7. ダイマジンは幼果期のメロン、ばらにはかからないようにする(葉害)。 8. QoI剤に関する注意事項「56. 野菜類の総括注意」参照。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
うどんこ病 (F)	植 付 前	<p>[参考農薬]</p> <p>1. サンヨール 500 倍液に瞬間～5 分間苗浸漬する。</p>	<p>1. 浸漬はポット苗とし、根を露出した状態では使用しない(薬害)。</p> <p>2. 浸漬は最低でも5～10 秒程度行い、根部全体に十分薬液が浸透するようにする。</p>
	生 育 期 間	<p>1. サンヨール 500 倍液、ハーモメイト水溶剤 800 倍液、ジーファイン水和剤、ポリオキシンAL水和剤の1,000 倍液、アミスター20フロアブル1,500 倍液、パンチョTF顆粒水和剤2,000 倍液、トリフミン水和剤3,000 倍液、ルビゲン水和剤4,000 倍液、ガッテン乳剤の5,000 倍液のいずれかを散布する。</p> <p>2. 気門封鎖剤であるオレート液剤、粘着くん液剤の100 倍液、サフオイル乳剤300 倍液、ムシラップ500 倍液、フーモン1,000 倍液を散布する。</p> <p>3. ボタニガードESの1,000 倍液、又はボトピカ水和剤2,000 倍液を散布する。</p> <p>4. ボトキラー水和剤を1日当り15g/10aダクト内投入して飛散させる。</p> <p>[参考農薬]</p> <p>1. ダイマジン2,000 倍液、フルピカフロアブル2,000～3,000 倍液、プロバティフロアブル3,000～4,000 倍液、ストロビーフロアブル3,000～5,000 倍液、ベルコート水和剤4,000 倍液(ただし育苗期はベルコート水和剤1,000 倍液)のいずれかを散布する。</p> <p>2. 園芸用ガラス室、ビニールハウス、ビニールトンネル等密閉可能な場所では、フルピカくん煙剤を室容積500立方メートル(床面積250㎡×高さ2m)当り50gくん煙する。</p>	<p>1. 苗からの持ち込みが多いので親株床の防除徹底を図る。</p> <p>2. オレートは、アルカリ性の薬剤である。</p> <p>3. オレート、粘着くん、サフオイル、ムシラップ、フーモンは一部の害虫に対しても殺虫効果を有するが、ミツバチ、マルハナバチに対しては、直接虫体にかかったり巣箱にかからなければ影響ない。また、散布直後の放飼も可能である。</p> <p>4. 気門封鎖剤、ハーモメイトは接触剤であるので、初発を確認してからの散布とし、薬液が葉裏までムラなくかかるようにいねいに散布する。</p> <p>5. ジーファインは、少量の水で希釈すると発泡するので、初めから所定量の水全量かその1/2 程度の水に少量ずつ攪拌しながら加えて溶解する。</p> <p>6. ジーファインは、ジチオカーバマート系殺菌剤(マンゼブ等)との混用、近接散布を避ける(薬効の低下・薬害)。また、過度の連用は銅の薬害が出やすいので注意する。</p> <p>7. サンヨールは保護殺菌剤であり、多発してからでは効果が劣るので、予防～発生初期に使用する。</p> <p>8. トリフミン、パンチョTF、ポリオキシン及びルビゲンは連用すると耐性菌を生ずる恐れがあるので、他剤とローテーション散布する。</p> <p>9. QoI 剤に関する注意事項「56. 野菜類の総括注意」参照。</p> <p>10. ボタニガードES、ボトピカ、ボトキラーは生物農薬である(「56. 野菜類の総括注意」参照)。</p> <p>11. ボトキラーのダクト内投入についての注意事項「56. 野菜類の総括注意」参照。</p>

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
炭 疽 病 (F)	育 苗 期	1. 無病苗を用いる。 2. 発生を認めた場合には、速やかに罹病苗を除去する。 3. アントラコール顆粒水和剤、キノンドーフロアブルの 500 倍液、ベルコート水和剤 1,000 倍液、アミスター 20 フロアブル 2,000 倍液のいずれかを散布する。	1. 薬剤耐性菌を出現させないため、同一系統薬剤は連用しない。 2. 底面吸水による採苗は感染抑制効果がある。 3. 換気を図り、施設内が過湿にならないようにする。 4. QoI 剤に関する注意事項「56. 野菜類の総括注意」参照。 5. ファンタジスタは魚毒に注意する。
	生育期間 (本圃)	1. 発生を認めた場合には、速やかに罹病株を除去する。 [参考農薬] 1. オーツサイド水和剤 80 の 800 倍液、ゲッター水和剤、セイビアーフロアブル 20 の 1,000 倍液、ファンタジスタ顆粒水和剤 2,000 倍液のいずれかを散布する。	
ウイルス性 病 (V)	植 付 前	1. ウイルスフリー苗を用いる。	1. アブラムシ類の早期防除を行う。
	生育期間	1. 発病株は抜き取り、ほ場外に埋却する。 2. 施設では、戸窓に防虫ネット (0.8mm 目合い) を張って媒介虫の侵入を防ぐ。	
アブラムシ類	定 植 時	1. アドマイヤー 1 粒剤、又はモスピラン粒剤を 1 株当たり 0.5g 植穴土壌混和する。	1. アドマイヤー、モスピランは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。 2. アドマイヤーは、ミツバチ、マルハナバチに影響がある。本剤を処理したほ場でミツバチを導入する場合は、処理 35 日以上経過した後に行う。
	生育期間	1. ウララDF、バリアード顆粒水和剤、モスピラン顆粒水溶剤の 4,000 倍液、チェス顆粒水和剤 5,000 倍液のいずれかを散布する。 2. エコピタ液剤 100 倍液、又はサンクリスタル乳剤 300 倍液を散布する。	1. モスピラン、バリアードは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。 2. チェス、ウララは、訪花昆虫や天敵類に影響が無い。エコピタ、サンクリスタルは昆虫の気門をふさぎ、窒息させて殺虫するので、虫体に直接かかるよう寄生部を中心に十分量を散布する。さらに多発時は 5～7 日程度の間隔で連続散布する。
	生育期間 (施設栽培)	1. 開口部を防虫ネット (0.8mm 目合い) で被覆する。 2. コレマンアブラバチ (アフィパール) を 10a に 1,000 頭の割合で放飼する。放飼方法は、栽培施設内でボトルのふたを開けて株元に静置するか、ほ場全体の株元に少量ずつまく。	1. コレマンアブラバチは生存日数が短いので、入手したらすぐに全量を放飼する。 2. ワタアブラムシやモモアカアブラムシには寄生するが、それ以外の大型アブラムシには寄生しないので発生種に注意する。 3. 多発してからでは効果が劣るので発生初期に放飼する。 4. 最終放飼 2 週間後のアブラムシ個体数が株当たり 10～20 頭なら追加放飼を行い、20 頭を超えたら薬剤防除に切り替える。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
アブラムシ類	生育期間 (施設栽培)		5. 農薬の影響を避けるため、殺虫剤の散布に当たっては、スポット散布を心がける。 農薬の散布に当たっては天敵に影響の少ない薬剤を使用する（「XV 資料1. 農薬の天敵等への影響の目安」参照）。
アザミウマ類	生育期間	1. 施設の開口部を防虫ネット(0.4mm 目合い)で被覆して、侵入を抑制する。 2. カウンター乳剤の2,000倍、ディアナSCの2,500倍液、カスケード乳剤の4,000倍液のいずれかを散布する。 3. スワルスキーカブリダニ剤(パック製剤)を10aに200個の割合で設置する。 [参考農薬] 1. マッチ乳剤の1,000~2,000倍液、モスピラン顆粒水溶剤、モベントフロアブルの2,000倍液、スピノエース顆粒水和剤の5,000倍液のいずれかを散布する。	1. モスピラン、スピノエース、カスケード、カウンター、ディアナ、マッチは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。 2. モベントは蚕毒に注意する。 3. モベントは水産動物(甲殻類)に影響があるので注意する。 4. モベントは不稔などの薬害のおそれがあるため、水稻にかからないように注意する。 5. スワルスキーカブリダニはアザミウマの発生前~発生初期に設置を行う。夏秋いちごでは開花前が望ましい。ただし低温に弱いため遅霜には注意する。 6. パックからスワルスキーカブリダニが放出され効果を発揮するまでには設置から1~2週間程度を要する。特に低温の場合は時間を要するため注意する。 7. スワルスキーカブリダニを設置した施設の農薬の散布に当たっては、天敵に影響の小さい薬剤を使用する(「XV 資料1. 農薬の天敵等への影響の目安」参照)。
オンシツコナジラミ	生育期間	1. モスピラン顆粒水溶剤2,000倍液、又はチェス顆粒水和剤5,000倍液を散布する。 2. プリファード水和剤1,000倍液を散布する。 [参考農薬] 1. ボタニガードES1,000倍液を散布する。	1. チェスは低密度期から散布する。 2. プリファード、ボタニガードは微生物農薬であり、使用方法と注意事項については、「1. 野菜類」のコナジラミ類の項を参照。 3. プリファードは施設栽培での登録であり、露地栽培では使用できないので注意する。 4. ボタニガード、モスピランは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
	生育期間	<p>1. ダニサラバフロアブル、マイトコーネフロアブルの1,000倍液、コテツフロアブル、ダニオーテフロアブル、ニッソラン水和剤、バロックフロアブルの2,000倍液、ピラニカEWの3,000倍液のいずれかを散布する。</p> <p>2. 粘着くん液剤の100倍液、サフオイル乳剤、サンクリスタル乳剤の300倍液、アカリタッチ乳剤、フーモンの1,000倍液のいずれかを散布する。</p> <p>[参考農薬]</p> <p>1. ダニトロンフロアブル 1,000～2,000 倍液、コロマイト水和剤 2,000 倍液のいずれかを散布する。</p>	<p>1. 下葉の枯葉を除き、株元を清掃する。</p> <p>2. アカリタッチ、サフオイル、サンクリスタル、粘着くん、フーモンは、昆虫の気門をふさぎ、窒息させて殺虫するので、虫体に直接かかるよう寄生部を中心に十分量を散布する。さらに多発時は、5～7日程度の間隔で連続散布する。</p> <p>3. サフオイルは高温時の散布は避ける（薬害）。</p> <p>4. コロマイトは蚕毒及び魚毒に、バロックは蚕毒に、コテツ、ピラニカ、ダニトロンは魚毒に特に注意する（特別指導事項参照）。</p> <p>5. コテツ、ダニトロンは蚕毒に、ダニオーテ、バロックは魚毒に注意する。</p> <p>6. ダニオーテは銅剤との混用・近接散布により効果が減じるため注意する。</p>
ハダニ類	生育期間 (施設栽培)	<p>1. チリカブリダニ（スパイデックス）を10aに6,000頭、又はミヤコカブリダニ（スパイカルEX）を10aに2,000～6,000頭の割合で放飼する。</p>	<p>1. ミヤコカブリダニ（スパイカルEX等）は、1振りの散布量が少ないため、施設全体に放飼する時は散布ムラに注意する。</p> <p>2. スパイカルEXは餌としてサヤアシニクダニを添加してあり、いちご・人畜への影響は小さいが、アレルギー体質の人は取り扱いに十分注意する。</p> <p>3. カブリダニ類は生存日数が短いので、入手したらすぐに全量を放飼する。</p> <p>4. 多発してからでは効果が劣るので、ハダニ類の発生を認めたらすぐに1週間間隔で2～3回放飼する。その後、再発生し始めたらその場所を中心に追加放飼する。なお、ミヤコカブリダニは発生前に放飼しても良い。</p> <p>5. 最終放飼2週間後に捕食されたハダニの死骸が認められない場合は、薬剤による防除に切り替える。</p> <p>6. 農薬の影響を避けるため、殺虫剤の散布に当たっては、スポット散布を心がける。</p> <p>7. 農薬の散布に当たっては、天敵に影響の小さい薬剤を使用する（「XV資料1.農薬の天敵等への影響の目安」参照）。</p>

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
ミカンキイロ アザミウマ	生育期間	1. 施設の開口部を防虫ネット(0.4mm 目合い)で被覆して、侵入を抑制する。 2. アーデント水和剤 1,000 倍液、又はマラソン乳剤 2,000 倍液を散布する。 [参考農薬] 1. アタブロン乳剤 2,000 倍液を散布する。	1. 多発してからでは防除効果が劣るので、発生初期に散布する。 2. 青色粘着トラップを用いて成虫の発消長を把握する。 3. アーデントは蚕毒及び魚毒に、アタブロンは蚕毒に特に注意する(特別指導事項参照)。
イチゴ メセンチュウ	収穫後 育苗中 3～4月	1. 健全な母株から採苗する。 2. 健全苗を植える。	
ネコブ センチュウ	作付前	1. 土壌線虫の項を参照する。	

蜜蜂に対する農薬の影響*

薬 剤 名	薬剤散布後放飼可能になる日数**	
殺菌剤	アミスター20フロアブル	1 日 後
	オレート液剤	1 日 後
	サンヨール乳剤	3 日 後
	ジーファイン水和剤	1 日 後
	スミレックス水和剤	3 日 後
	トリフミン水和剤	3 日 後
	ハーモメイト水溶剤	1 日 後
	ポリオキシシンAL水和剤	3 日 後
	ルビゲン水和剤	3 日 後
	ロブラール水和剤	3 日 後
殺虫剤	アーデント水和剤	2 日 後
	アカリタッチ乳剤	1 日 後
	アドマイヤー1粒剤	30 日 後
	ウララDF	当 日
	カスケード乳剤	1 日 後
	コテツフロアブル	10 日 後
	コロマイト水和剤	1 日 後
	スピノエース顆粒水和剤	1 日 後
	ダニサラバフロアブル	1 日 後
	ダニトロンフロアブル	1 日 後
	チェス顆粒水和剤	当 日
	ディアナSC	3 日 後
	ニッソラン水和剤	当 日
	バリアード顆粒水和剤	1 日 後
	バロックフロアブル	1 日 後
	ボタニガードES	1 日 後
	マイトコーネフロアブル	1 日 後
	ピラニカEW	1 日 後
	マッチ乳剤	1 日 後
	マラソン乳剤	10 日 後
モスピラン顆粒水溶剤	1 日 後	
モベントフロアブル	1 日 後	

注) *各種の資料を引用して作成した。

**低温期の蜜蜂は活動力が弱いことや、農薬散布による影響を長期的にわたって受けることがあるので、この日数以上でも影響が残る場合がある。